

# 図書館だより

## カタカナ語と国際化

図書館長 村田 和穂



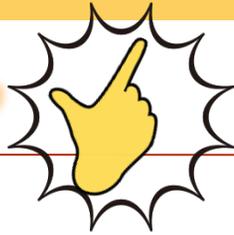
カタカナ語（カタカナ表記の外来語）は言うまでもなく日本語の語彙の重要な一部である。その領域は確実に拡がっており、従来の大和言葉や漢語が占めていた領土を脅かしている。ダイバーシティ、コンプライアンス、インセンティブ等、いくら挙げても切りがない。年々怒濤の如く押し寄せている感がある。国際化の流れなので「それは当然」と考える向きがある。私は英語教員だが、それを手放しで喜べない、むしろある種の危機感を覚える。なぜか。理由の一つはカタカナ語が定着すれば、それまでその概念を表していた語彙が淘汰されていくからだ。まず古語になり、そのうち廃語になる。私は別に保守主義者ではないが、美しい日本語が失われていくのは、あたかも我が国の美しい自然が〈開発〉という名目で破壊されていく様を思い起こさせる。それだけではない。カタカナ語の実に多くが曖昧な意味合いを帯びて一人歩きしていると常々感じているからだ。このような違和感を覚えるのは自分一人かと思っていた折に、作家の町田康が新聞に興味深いことを書いていたので引用する：

「（前略）くれぐれもハラスメント行為を行わないように注意しなければならない。ところがそれがなかなか難しいのは、ハラスメントというのが、harassment、という英語由来のカタカナ語なので、その語の輪郭が日本人にとって臆（おぼろ）であるからである。だからこれを「迷惑行為」、「嫌がらせ行為」と日本語で言えば、誰もが、「それやったらあかんやろ」という共通認識に容易に至ることができるのだけれども、ハラスメント行為、と言い換えると、忽（たちま）ちその輪郭が滲（にじ）んで、個人が不快と覚えること全般、という、実際に言われてみないとわからないところにまで輪郭が膨張するのである（後略）」（「朝日新聞」2025年10月8日）

カタカナ語の持つ危うさを、町田さんが「輪郭が膨張する」と絶妙に表現したことに共感する。この引用からも分かるように、彼は意識的にカタカナ語を避け、漢字表記の言葉を多用する（最近の著書『入門 山頭火』はそのような姿勢が反映された快作である）。だからというわけではないが、私は授業で英文を和訳する時、できる限りカタカナ語を使わないように、と指導している。つい先日のこと、本科2年生で使用している教科書に次のような英文があった（アルゼンチンからの留学生と日本人の生徒がそれぞれの母語を話せないという状況で）：“Both of you can use English to **communicate**.” 試しに〈Google 翻訳〉を使うと「二人とも英語を使ってコミュニケーションをとることができます」と出た。成程、正解ではあるが、問題は〈コミュニケーション（をとる）〉という訳語である。この場面での“communicate”は表層的な言葉のやり取りではなく、〈わかり合う〉という意味である。安易に〈コミュニケーション〉で納得して欲しくない（と学生にも力説した）。だから、私の授業では、例えば“business”を〈ビジネス〉で済ませず、〈商売〉や〈事業〉など必ず複数の対応する日本語を紹介している。〈business = 事業〉という等式は受験英語以外の文脈では成立しないのだ。

最後に、個人的な思い出を一つ。21歳の時、初めて海外（英国）に行った。海に臨む小さな町に約2ヶ月間いわゆる〈ホームステイ〉をして、現地の語学学校に通った。それでも英会話は上達しなかった。最後、家族と別れる時、感謝の気持ちを伝えたいのに上手く言葉が出てこない。その家のお父さんが私の切ない表情を受け止め、“I understand”と言って、固い握手を交わしてくれた。その時の笑顔と声と手の温もりは今も思い出せる。これが私にとっての“communicate”の実感なのである。

# 私のイチオシ



人間・福祉工学系  
情報システムコース 森山 英明 先生



## 『はてしない物語』

(ミヒヤエル・エンデ 著  
上田真而子、佐藤真理子 訳)

情報システムコースの森山です。今回、私のイチオシとして、ミヒヤエル・エンデ著の『はてしない物語』を紹介します。私がこの本をおすすめしたい理由は、物語を読むという行為を通して、想像することの価値を実感できるからです。

『はてしない物語』は、私が小学生の頃にも買ってもらい、夢中で読み進めた一冊でした。冒険物語として楽しむだけでなく、「自分だったらどうしただろう」と想像を膨らませながら何度も読み返し、次第に大切な本となっていきました。文庫版もありますが、物語の中で主人公が手にする本と同じ、あかがね色の装丁のハードカバー版は、自身が本を読み、物語に引き込まれていくことを強く意識させてくれます。

物語の主人公は、バスチアンという名前の少年です。母を亡くしたことで父は無気力となり、学校生活もうまくいかず、彼は孤独を感じています。唯一、想像することは得意ですが、それは日常生活では役に立たないものであると考えています。そんな彼が偶然手に取った一冊の本が、『はてしない物語』でした。この本では、ファンタジーエンという世界を舞台に、少年アトレユが世界の危機を救うために世界を旅する冒険が描かれます。読者が手にしている『はてしない物語』の中に、さらに『はてしない物語』が登場するため、少し混乱するかもしれません。しかし、バスチアンの状況や考えを交えながら物語が進むことで、彼と一緒に本を読んでいるような、不思議な感覚を覚えます。

この物語の仕組みとしての面白さは、冒険の内容だけでなく、その語られ方にあります。アトレユの冒険は王道のファンタジーとして描かれますが、読み進めるうちに、この物語が「誰かに読まれること」自体を強く意識して書かれているように感じてきます。本を読むとき、読者は本来、物語を外から眺める第三者であるはずですが、しかし、いつの間にかその立場は揺らぎ、読むという行為そのものが物語の一部になっていきます。この仕掛けによって、物語を読んでいるバスチアンと、本を手にしている私たちとの距離が近づいていきます。ここに、『はてしない物語』ならではの魅力があります。

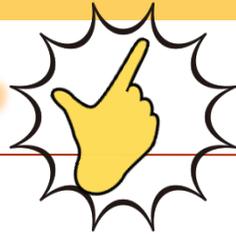
この物語の中心にある問いは、「汝の 欲する ところを なせ」という象徴的な言葉に表れているように思います。物語の中でバスチアンは、美しさ、力、名誉、賢さなど、様々な「望み」について考えることとなります。本当に自分が満たされる「望み」とは何か。この問いは、物語の登場人物だけでなく、読んでいる私たち自身にも向けられているように感じます。私自身も読み返すたびに、「今の自分の本当の望みは何だろうか。お金を儲けることや自己顕示欲を満たすことだろうか」と考えさせられました。物語の中では、「ファンタジーエンを訪れるたびに、人はそれまでとは違う自分になって戻ってくる」と語られています。本を読むことで、私たちもまたファンタジーエンを訪れ、自分の変化や成長を確かめることができる、奥行きのある物語だと思えます。

この本に限ったことではありませんが、小説は「こうなさい」と答えを教えてくれるものではありません。物語を読み、想像すること自体に意味があるのだと思います。物語の最初にバスチアンが考えていたように、想像することは日常生活では役に立たないと感じるかもしれませんが、しかし、自分だったらどうするか、どう感じるかと考える中で、その人だけの気づきが生まれてきます。私自身、久しぶりに『はてしない物語』を読み返し、懐かしさと同時にまた新しい発見がありました。

これは私の物語です。けれども、この先はまた別の物語。いつか、皆さん自身がこの本を開き、ファンタジーエンを訪れてみてください。

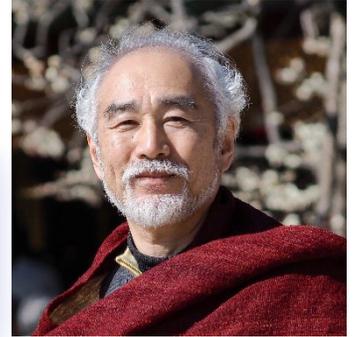


## 私のイチオシ



一般教育科・社会  
山口 英一 先生

『深遠なるインド料理の世界』  
(小林 真樹 著)



あなたは「ビリヤニ」をご存じでしょうか？ペルシャの宮廷料理からインド各地で様々な形に発展した「米料理」ですが、日本では2024年の夏に東京の南インド料理専門店エリックサウスの稲田俊輔さんの監修でセブンイレブンで発売されたことで一気に知られるようになり、2025年秋に乃木坂46の40枚目シングルタイトルになりました。この本は、ビリヤニはもちろん、日本でも一般的になったナンやチャイなどを含めた「インドの食」を巡って、料理そのものはもちろん、食器や調理法、その背後にある文化背景までを描いた作品です。

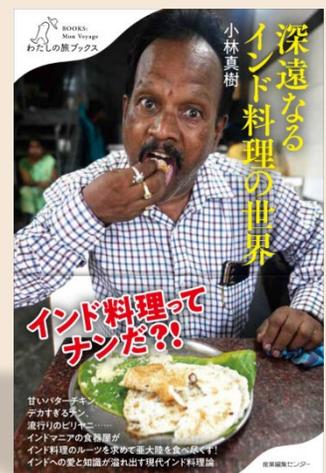
著者の小林正樹さんは、インド好きが高じてインド食器・調理器具の輸入卸業を生業（なりわい）にしている、日本全国のインド料理店関係者、インド料理自作愛好者の間では、かなり知られた存在です。4月に福岡で開催されているインド文化イベント「ナマステ福岡」にも東京からトヨタ・ハイエースに一杯の食器類を積んできて出店します。

最近の彼の活動は、日本国内やインド各地（実はヨーロッパと並ぶほどの広さ）はもちろん、アジア諸国やカリブ海の島、ヨーロッパからアフリカにまで足を伸ばしてインド人社会を訪問し、現地での「食」を味わいながら、その「食文化」を観察した本を次々と出版したり、ネットメディアへ寄稿したりしています。決しておしゃべりではない小林さんですが、ぼそぼそと英語・ヒンディー語で語りかける「人たらし」の性格で、行く先々のレストランの厨房どころか、市場で野菜を売っているオバちゃんやタクシーの運転ちゃんの自宅台所へも入り込んで話を聞き出します。さらには地方独自の宴会料理を知るために10人分の料理を注文し、現地の方々に食べるのを手伝ってもらいながら、その調理法や食べ方を取材します。「美味しいから食べるのではなく、知りたいから食べる」彼は、自ら「食べることのプロ」を自称するだけあって、時には1日5食を残さず食べることも。

チャイについても面白い話が紹介してあります。私が住んでいた西部インドのグジャラート州では、チャイを「カップから受け皿に移して飲む」という古いイギリスでのやり方が、まだ一部に残っていることを以前に小林さんに情報提供したことがありました。そしてグジャラート州西部のカッチ地方を訪れた彼は「受け皿のみを渡され、それにチャイを注いで飲む」という、独特の飲み方を体験したことをこの本で紹介しています。

誰もが毎日繰り返している「食べること」ですが、たとえば最初に話した「ビリヤニ」は、よく「塩味のヨーグルト」と一緒に、時にはそれを上にかけて食べられます。米料理にヨーグルト？それも塩味？って思いますか。そんな話を讀んだり聞いたりすると、実は無意識のうちに自分が知っているものが「当たり前」になっていて、それ以外の「調理法」や「食べ方」などに対する驚きがあることに気づかされます。

この本を読むと「本物の」とか「正しい」とかの判断が、実は一時的な姿や誰かが作り出した幻想に過ぎないことが見えてきます。すべての物事は常に変化を続けている、というゴータマの見つけた真理を再確認させられるようです。この本が皆さんの食の体験と自分の常識を広げてくれるキッカケになることを願ってご紹介します。



## 情報検索についてご案内

データベース、電子ジャーナル、電子書籍等をご案内します。

※学内者限定

- ★有明高専蔵書検索（OPAC） <https://libopac-c.kosen-k.go.jp/webopac47/cattab.do>  
本校図書館の資料を検索できます。

また、各タブから、以下を利用できます。



- ★CiNii Books、CiNii Research

国立情報学研究所（NII）が提供する図書・雑誌や論文を検索できるデータベース

- ★IRDB（学術機関リポジトリデータベース）

日本国内の学術機関リポジトリに登録されたコンテンツのメタデータを収集し、提供するデータベース・サービス

- ★NDL Search（国立国会図書館サーチ）

国立国会図書館の所蔵資料等の検索が可能

- ★青空文庫

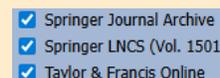
著作権が消滅した作品等を公開しているWEBサイト

- ★JDreamIII <https://jdream3.com/university/id-login.html>  
日本最大級の科学技術文献データベース  
ID/Passは図書館または教員にお尋ねください。

- ★ScienceDirect\* <https://www.sciencedirect.com/>  
エルゼビアが提供する科学・技術・医学・社会科学分野を網羅する電子ジャーナル・電子ブックサービス

- ★NII-REO（電子ジャーナルアーカイブ）\* <https://reo.nii.ac.jp/oja/>  
電子ジャーナルコンテンツ（バックファイル含む）の閲覧が可能です。  
本校は以下のジャーナルの利用ができます。

- ・ Springer Journal Archive
- ・ Lecture Notes in Computer Science (Vol. 1501- Vol. 1760)
- ・ Taylor & Francis



- ★電子書籍

「Maruzen eBook Library\*」、「KinoDen\*」中の本校が契約している電子書籍を閲覧することができます。

また、「化学書資料館」は2026年12月まで利用可能です。※延長しました。

（『化学便覧 基礎編』、『化学便覧 応用化学編』、『実験化学講座』、『標準化学用語辞典』が収録されています。）

電子書籍利用の際は、OPACに「電子ブック」と入力し、検索してみてください。

有明高専蔵書検索（OPAC）

<https://libopac-c.kosen-k.go.jp/webopac47/cattab.do>



\*: 「学認」からのログインで学内LAN以外からも利用可能なもの

## 専攻科生より本科生に薦める 1冊の本

『逆ソクラテス』  
伊坂 幸太郎 著6E  
出村 翼『QRコードの奇跡』  
モノづくり集団の発想転換が革新を生んだ』  
小川 進 著7E  
前田 玲

私が本科生にお薦めする本は伊坂幸太郎さんが書かれた短編集の『逆ソクラテス』です。

表題作の『逆ソクラテス』は、古代ギリシャの哲学者ソクラテスの説いた「無知の知(自分は何も知らないと自覚する)」とは対照的な大人たちが登場します。生徒に対して、「あの子は成績が悪いからダメだ」、「どうせあいつは変わらない」と上の立場から決めつけてくる教師の先入観を崩すために小学生たちが作戦を練り現状をひっくり返そうとする話です。この話ではレッテルを疑うことで、世界の見え方がかわっていく様子がえがかれています。

私がこの本を読んだときに特に「僕は、そうは思わない」というセリフが印象的でした。このセリフは子供が大人の考えに対して正面から否定するのではなく、自分の気持ちを大事にしているのがすごく良いと感じます。また、周囲の空気に流され自分の本当に言いたいことを言えないときなどにこのセリフのように自分の主張を大事にしていきたいと感じさせられました。

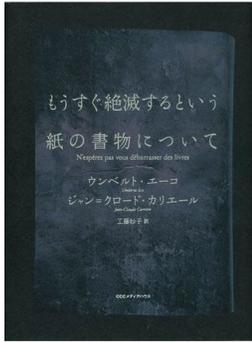
私がこの本をお薦めする理由は2点あります。一つ目の理由としては作者の伊坂幸太郎の書く本は軽快な会話が多いため、本をあまり読まない人でも読みやすいことです。二つ目の理由としては自分の中にある無意識の偏見に気付かせてくれることです。私自身、無意識に先入観から決めつけたり思い込んだりすることがあります。そして、この本を読むことでその決めつけや思い込みを見直すきっかけになりました。そのため、ぜひこの本を読むことで、無意識に他人を不当に評価していないかを見直すことや、もし不当に評価されていると感じるのならば、「自分は、そうは思わない」と自分の主張を大事にするきっかけにしてほしいです。

『QRコードの奇跡』を読んで最も印象に残ったのは、身近すぎて意識していなかったQRコードの裏側に、これほど多くの挑戦と工夫が積み重なっていたという点です。皆さんもQRコードを使ったことや見たことがあると思います。現在では、QRコードは当たり前のようにスマートフォンや店舗で利用されていますが、その誕生は単なる技術の進歩ではなく、「現場の困りごとをなんとか解決したい」という思いから生まれたものだったと知り、驚きました。特に、トヨタのかんばん方式の課題解決を出発点として、デンソーの開発チームが「もっと速く読み取れる」「もっと多くの情報を入れられる」仕組みを模索し続けた過程は、地道でありながら非常に魅力的だと感じました。

また、QRコードが世界的に成功した理由として、技術力だけでなく、標準化への取り組みや企業の枠を超えて普及させようとする姿勢が大きく影響していることにも深い学びがありました。多くの企業は独自規格にこだわりますが、QRコードはあえて特許を無償開放し、誰でも使える仕組みにしたことで国境を越えて広まっていきました。技術そのものよりも、「どのように共有し、社会に役立てるか」という視点の重要性を改めて感じました。

読み進める中で、私たちが日常で使っている便利なものは、必ず誰かの問題意識と粘り強い努力の結果として生まれているのだと気づかされました。本書は、単なる技術史ではなく、イノベーションとは何かを考えさせてくれる一冊だと思います。私自身も日々の小さな疑問や不便さを見逃さず、工夫を積み重ねる姿勢を大切に、学校生活や研究の面で生かして行きたいと思いました。

『もうすぐ絶滅するという  
紙の書物について』  
ウンベルト・エーコ、  
ジャン＝クロード・カリエール 著  
工藤 妙子 訳



6C  
河野 優生

私が紹介する本は、書物の愛好家である記号学者ウンベルト・エーコと脚本家ジャン＝クロード・カリエールの対談『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』です。

皆さんは近い将来、書物が電子書籍の台頭により絶滅すると思いますか？2010年、電子書籍元年と言われて早16年が経つわけですが、今もなお書物は健在です。答えとして、本書では序文で早々に「「電子書籍」が書物を滅ぼすことはないでしょう」と、コーディネーターのジャン＝フィリップ・ド・トナップは述べています。エーコもまたこの問いに対し、対談にて「本は、スプーンやハンマー、鋏と同じようなものです。一度発明したら、それ以上うまく作りようがない。（中略）本は本のままですよ。」と述べています。

彼らがそのように言い切れるのは書物の保存性と文化という選別があるからです。デジタル技術は目まぐるしく移り変わるため、メモリに保存したデータは数年も経つと読み取るための機器が無くなり、確認することすらできなくなることがあります。一方で、書物は500年も前のインキュナビュラでさえも自然光さえあれば読むことができます。また、書物は様々な選別の末残ったものであり、何を残し、何を捨てるべきかという議論の末、時には炎による検閲を潜り抜けた人類の叡智の結晶です。

タイトルだけ見ると、先述したような対電子書籍といった内容が延々と続きそうですが、実際のところ本書の醍醐味は彼らの書物に対する底知れぬ愛です。彼らの圧倒的な書物に対する愛、そして博識ぶりには圧倒されます。フランスやイタリア、イギリスなどのヨーロッパを中心に、書物を様々な角度から見た、歴史や宗教、芸術、哲学など、あまりの範囲の広さに知らないことも多かったです。彼らの熱い思いに強く引き込まれました。

対談であり、あまり見慣れない形式の本かもしれませんがぜひ読んでみてください。

『また、同じ夢を見ていた』  
住野 よる 著



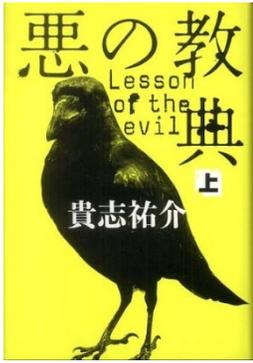
7M  
廣田 光稀

『また、同じ夢を見ていた』というタイトルを見た瞬間、胸の奥がくすぐられるような、どこか懐かしくもすこし切ない予感がした——この小説は、そんな不思議な余韻から始まります。読んだあと、あなたもきっと「幸せ」について考えずにはいられなくなる一冊です。

物語の主人公は、小学生の女の子・奈ノ花。彼女は学校で「自分にとっての幸せとは何か」を考えるよう宿題を出されます。ある日、草むらで出会った一匹の猫をきっかけに、手首に傷のある南さん、とても格好いい「アバズレさん」、そして一人暮らしの老女など、さまざまな人生を背負った人たちと出会っていきます。彼らの言葉や行動の一つひとつが、奈ノ花の心に深く響いて、彼女自身の中の答えを少しずつ形づくっていきます。この過程は、読んでこちらの胸にもじんわりと伝わり、登場人物たちの人生の影や光が、まるで自分のことのように感じられます。

この物語を読み終えたとき、私は「幸せ」は決してひとつの答えではなく、それぞれの人がそれぞれの時間の中で見つけていくものだとして強く思いました。奈ノ花が出会う人々は一見バラバラで、過去や抱えているものも違います。しかし、彼らが語る言葉や笑顔は、どれもが真摯で、静かに心を揺さぶってきます。読むたびに、忘れかけていた感情がよみがえってくるような、不思議な余韻が残りました。

『また、同じ夢を見ていた』は、幸せとは何かを問い直すための物語であり、同時に「生きること」の尊さをそっと教えてくれる作品です。日常の中で立ち止まってしまったとき、この本を開けば、また前に進む力をくれるはず。あなたもぜひ、この夢の続きを自分の心で見つけてみてください。皆が抱える悩みや迷いに寄り添いながら、読む人の胸にじんわりと染み入る一冊です。



『悪の教典』  
貴志 祐介 著



6E  
藤末 永久

私がおすすめるのは『悪の教典』です。『悪の教典』は貴志祐介によるサイコ・ホラー小説で、人間の善と悪について考えさせられる作品です。物語の舞台は、どこにでもある普通の高校です。そこに勤める英語教師・蓮実聖司は、見た目もよく頭も切れる人物で、生活指導も任されるような生徒や他の教師から信頼される存在としてはじめは描かれています。生徒の相談にも丁寧に対応し、学校で起こる問題にも落ち着いて対処する姿は、理想的な教師そのものです。

しかし、物語が進むにつれて、蓮実の行動に読者は少しずつ違和感を覚えます。いじめや教師同士の対立、保護者からの苦情など、学校という閉ざされた環境の中で起こる問題に対し、彼は感情をあまり表に出さず、常に冷静で合理的な判断を下します。その対応は正しく見える一方で、読者に「どこかおかしいのではないか」と感じさせる場面も増えていきます。

本作は上巻と下巻に分かれており上巻では、派手な事件はあまり起こりませんが、日常の中にある小さな不安や緊張感が丁寧に描かれています。人間関係のすれ違いや価値観の違いが積み重なり、読者は自然と物語の世界に引き込まれていきます。特に、教師という立場から行われる指導や判断が、本当に正しいのかを考えさせられる点が私は非常に印象的でした。

また、『悪の教典』は実写映画化もされています。小説のような文章量の多い本を読むのが苦手な人は、まず映画を観てみてください。私も、映画を見たのがきっかけで小説を読み始めたため、皆さんも小説を読みたくなくなるはずです。

『悪の教典』は、ただ怖いだけの作品ではなく、人間の心の怖さや社会の危うさを描いた物語です。少し刺激のある作品を読みたい人や、人の本性について考えてみたい人にはおすすめる一冊です。



『コロナと潜水服』  
奥田 英朗 著



7A  
溝田 嵩弥

『コロナと潜水服』は、「海の家」、「ファイトクラブ」、「占い師」、「コロナと潜水服」、「パンダに乗って」の5つの作品からなる短編集です。新型コロナウイルスの流行によって変化した人々の生活や心情を描いた物語となっています。短編ごとに登場人物や状況は異なりますが不安、孤独、他者との距離といったテーマが共通していると思います。どの物語も印象に残りました。短編集であることで、さまざまな立場や価値観を通して、コロナ禍の社会を多角的に見ることができた点が印象的でした。

特に心に残ったのは「ファイトクラブ」の話です。感染対策によって日常の楽しみや発散の場が奪われ、人々の中に溜まっていくストレスや怒りが危うい形で表に出ていく様子が強く描かれていました。ただの暴力としてではなく、閉ざされた状況の中で自分が生きていることを確かめようとする行為のようにも感じられ複雑な気持ちになりました。

本全体を通して、タイトルにもあるように人々がまるで潜水服を着ているかのように、他者や社会から自分を守りながら生活している姿が描かれています。しかし「ファイトクラブ」の物語では、その潜水服を一瞬脱ぎ捨て、本音や衝動をさらけ出す場面があり、その対比が非常に印象深かったです。

短編集であるからこそ、読み進めるうちに自分の記憶や感情が呼び起こされました。当たり前だった日常や人とのつながりの大切さを考えさせられる一冊です。一度手に取ってみてください。



東野圭吾  
人魚の眠る家『人魚の眠る家』  
東野圭吾 著6M  
北岡 隼斗

もし、あなたの愛する子が脳死状態になったら、あなたはその死を受け入れられますか？

東野圭吾さんの『人魚の眠る家』は、プールでの事故により脳死状態に陥った幼い少女・瑞穂と、その家族の苦悩を描いた物語です。

この物語の核心は、「脳死は死なのか、それとも生なのか」という残酷な問いがあります。瑞穂の母・薫子は、臓器提供を拒み、自宅で娘を育てる道を選びます。最新技術を用いて瑞穂の身体を動かす、まるで瑞穂が生きているかのように振る舞う薫子の行動は、次第に狂気を帯びていきます。

読み進める中で、私は薫子の言動に対して言いようのない「不気味さ」を感じ、正直に言えば耐え難いほどの拒絶感を覚えました。動かないはずの娘を機械で動かすその姿は、周囲からは愛情ではなく執着に見え、「気持ち悪い」とさえ言われてしまいます。そこから私は、人間同士の価値観の相違を強く感じました。

しかし、本書の真の主題は、その断絶の先にある「意志」の在り方にあるのではないのでしょうか。誰にも理解されず、どれほど周囲に突き放されても、自らの信念を貫き通す薫子の姿には、ある種の神聖な強さが宿っています。相手に理解されないことを自覚した上で、それでも自らの意思で歩み続けること。その覚悟の重さに触れたとき、当初抱いていた嫌悪感は、いつしか「自分にとっての正解とは何か」という自問へと変わっていききました。

本作は、単なる悲しい物語ではなく、他者に理解されない孤独を受け入れてでも生きる強さと、その必要性を訴えかけていると感じました。読み終えた後、家にいる彼女を「生きている娘」と呼ぶか、それとも「ただの死体」と呼ぶか。自分の中の「当たり前」が揺さぶられる、ぜひ読んでほしい一冊です。

『悲鳴伝』  
西尾維新 著7M  
横山 幹太

西尾維新の『悲鳴伝』は、地球上の人類の七割が突如として死ぬという未曾有の大事件から物語が始まる、圧倒的スケールのフィクション作品だ。

私はもともとノンフィクションよりもフィクションが好きで、荒唐無稽ながらもよく聞くような物語にこそ強く惹かれるのだが、本作はまさにその欲求を真正面から満たしてくれた。

舞台となるのは、地球による“大いなる悲鳴”によって人口が激減し世間もその悲しみを受け入れ始めている世界である。

主人公・空々空(そらから くう)は、「何事にも感情を動かされない」という特性を持つ少年であり、腕っぷしは強くないが、その特性こそが世界を揺るがす事件の解決において重要な鍵となるため、彼は人類を救う“英雄”として「地球撲滅軍」に所属することになる。

英雄らしい活躍が描かれる一方で、空自身が抱える矛盾や空虚さが物語に独特の深みをもたらしており、その点も強く印象に残った。

また、“空々空”や“地球撲滅軍”という、いかにも西尾維新らしい奇妙でキャッチーなワードセンスも魅力だ。

シリアスな状況にポップさと狂気が同居するアンバランスさが、読み味をより刺激的なものにしている。

『悲鳴伝』は、物語の都合や常識をあえて無視するかのような大胆な構成で、読者に“先を読ませない”ことを徹底しているような作品であった。

私はフィクションに“現実ではあり得ない体験”で楽しませてほしいと思っているが、本作はその期待に大いに応えてくれた。

西尾維新特有の言葉遊びやテンポの良さも相まって、非日常に思い切り振り切った物語を求める読者にはぜひ薦めたい一冊である。



『人間みたいに生きている』  
佐原 ひかり 著



6A  
秋山 瑛二



『マスカレード・ナイト』  
東野 圭吾 著



7C  
西田 昌平

佐原ひかり『人間みたいに生きている』は、「当たり前」にうまくなじめない人の生き方を静かに、しかし鋭く描いた小説です。主人公の三橋唯は、高校生でありながら「食べる」という行為に強い嫌悪感を抱いています。食事は生きるために必要で、人とつながるための大切な時間でもある——そう頭では理解していても、身体と心がどうしても受け入れられません。そのために唯は、周囲に合わせて無理に食べるふりをしており、誰にも本音を打ち明けられずに孤独を深めていきます。

そんな唯が耳にするのが、「吸血鬼の館」の噂です。そこには、血を飲むことで生きている吸血鬼がいるといます。唯は、自分と同じように「食べられない」存在がいるかもしれないという期待を抱き、その館を訪れます。そこで出会った青年・泉は、血液しか口にできない体質を持ち、社会の中で異質な存在として生きてきた人物です。二人は互いの違和感や苦しさを共有しながら、少しずつ距離を縮めていきます。

しかし物語は、「理解し合えたから救われる」という単純な展開にはなりません。泉と出会ったからといって、唯の生きづらさがすぐに消えるわけではなく、他者に理解されること自体の危うさや限界も描かれています。

私たちは成長するにつれて、「普通であること」「周囲と同じであること」を求められる場面が増えていきます。しかし、その“普通”に苦しめられる人も確かに存在します。そうした違和感を否定せず、「違うまま生きる」という選択肢があることを、この本では示してくれます。自分の苦しみを無理に言葉にできなくても、それは弱さではありません。この小説は、人生の中で立ち止まったとき、自分を責めすぎずに生きるための視点を与えてくれる一冊だと思います。

私が紹介する本は、東野圭吾さんの『マスカレード・ナイト』です。本作は「マスカレード」シリーズの一作であり、豪華なホテルと仮面舞踏会という非日常的な舞台設定が強く印象に残るミステリー作品です。派手な展開に頼るのではなく、人の立場や役割の違いによって生まれる価値観のずれが丁寧に描かれています。

物語は、高級ホテルで開かれる仮面舞踏会を舞台に進みます。過去の事件と関わる人物が現れる可能性がある中、刑事はホテルに潜入し、素性を隠した参加者たちの中から真実へと迫っていきます。このような設定により、華やかな空間の裏側に潜む緊張感が際立っています。

本作の特徴は、「仮面」というキーワードを通して、登場人物が表に見せる顔と内面に抱えている本音との違いを表現している点にあります。登場人物たちは、それぞれの立場や責任を背負いながら行動しており、簡単には本心を明かしません。その姿は、私たちが日常生活の中で無意識に演じている役割と重なる部分もあります。

また、刑事とホテルマンという異なる職業観や信念を持つ人間同士の関係性も、本作の大きな魅力の一つです。考え方の違いから衝突しながらも、相手を理解しようとする姿勢が描かれており、人と人が信頼関係を築いていく過程が丁寧に表現されています。

華やかな空間の裏側に隠された人間の感情や選択を見つめる本作は、読み進めるほどに作品の世界観へ引き込まれていきます。仮面を通して描かれる人間関係は印象的で、立場の違いによる考え方の差についても深く考えさせられました。ミステリーとしての完成度はもちろん、人間ドラマとしても読み応えがあり、読み終えた後には「人を理解すること」について考えさせられる一冊です。

# 2026年有明高専美術ギャラリー作品紹介

## 絵画



『土蜘蛛』  
奥苑 和司



『ひき汐』  
小柳 規久絵



『静』  
藤吉 美保子



『希望の明日へ...』  
木戸 直道



『狩人』  
塚本 和美



『夕やけ』  
横山 多佳枝



『夕暮れの散歩』  
永井 正文



『洋梨とかすみ草』  
牟田 志津子



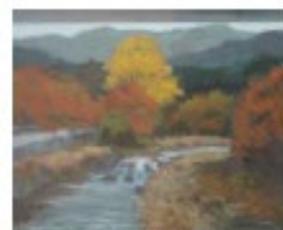
『根子岳』  
牟田 美昭



『薔薇』  
石井 保



『溪流』  
堤 和則



『秋』  
松尾 忠之



『底のさざんか』  
河島 房子



『ジャーマンアイリス』  
田中 栄



『花』  
岩本 久子



『秋の山路』  
坂口 勝夫



『白い花』  
木村 和子



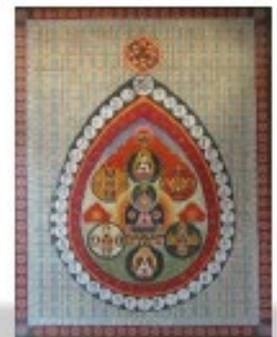
『黄衣の人形』  
嶋 秀海



『ゆり』  
田中 陽子



『牡丹』  
小川 研



『曼陀羅II』  
皆島 万作

## 写真



『Shadow』  
田中 浩久



『初わたり』  
浦田 碩也



『収穫の秋』  
鈴木 安徳



『ねぶたの若い衆』  
高口 博文



『巣づくり』  
渡邊 精之

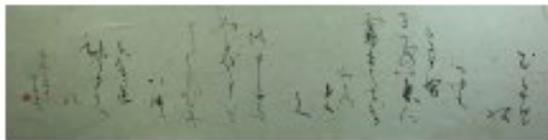


『不確実な世界』  
ふるいけ博文



『窓に夕景』  
河野 洋子

## 書



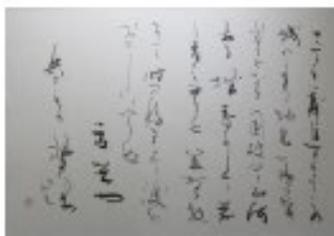
『百人一首より二首』  
寂蓮法師の歌 良蓮法師の歌  
松尾 理恵子



『茶鼎松風午夢回』  
田河 琴翠



『樂遊原（李商隱）』  
中本 管城



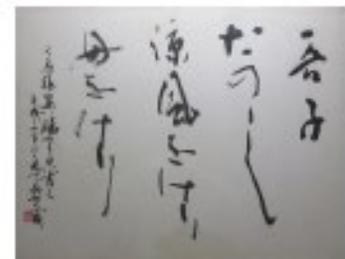
『奥の細道 -夏草や-』  
小柳 少華



『寒空五老雪』  
山口 八石



『おうい雲よ』  
山口 八石



『吾子たのし』  
小柳 少鼎

## 特設コーナー

### さて、私は何を書けばよいのか



図書館運営室室員 山田 高明

知らない学生も多いと思うが、本は生き物である。故に、適当な本を二、三冊部屋に数日放置しておいたら、知らない本がいつの間にか増えている。生き物なので、当然ながら本にも生老病死がある。虫に食われたり、日に焼けて褪せたり、製本がほどけて朽ち果てそうになったり、そして増えたり。本は植物というより、藻類に近いことが経験的に知られている。その証拠として、本は放っておくと層状の構造をなす。生物学の教科書に出てくるストロマトライトのようなものを想像するとわかりやすい。これをラテン語ではtsundocus（ツンドクス）、日本語では積読化石という。近くの教員を捕まえて部屋を見せてもらうとよい。そこかしこにたいそう立派なツンドクス石があるはずである。

最近読んで衝撃を受けた本に、打越正行氏の『ヤンキーと地元』（ちくま文庫）がある。沖縄のいわゆる「ヤンキー」が、どのように社会と関わり、人生を歩んでいるのかをまとめた研究調査記録である。社会学者であった打越氏は、この研究を行うために、自ら進んでヤンキーのパシリになった。ヤンキーに疎まれつつも交流を重ね、暴走するバイクの後ろにしがみつき、時には警察と対峙し、時には建設現場で労働もする。その中で、沖縄の地域社会を生き抜く彼らの姿があらわになる。「私には到底まねできない研究だ」と読みながら頭がくらくらする思いだった。

さて、ここで打越氏が取った研究手法は、一般に「フィールドワーク」と呼ばれるものである。研究者が実際のフィールドに身を置き、研究対象を直接観察・記録・収集する調査方法だ。人文・社会・自然科学いずれにおいても用いられる重要な手法のひとつである。前号で私の専門が言語学であることを書いたが、かくいう私もフィールドワーカーの一人だ。対象とする言語や方言が話されるコミュニティに行って、話者から教えてもらいながら、研究をまとめてゆく。時には九州山地の山深い場所で、時には有明海を見渡す海辺で。そのような場所で、話者のやり取りを通じて、どの教科書にもどの論文にも言及されていない言語現象にぶつかったときの衝撃といったら言うまでもない。数年前にその結果の一つを本として刊行することができた（開拓社『プロソディー研究の新展開』第8章「熊本県八代市坂本町上深水方言のアクセント単位拡張現象」）。こんなことを書いていると、「あ、あれをやらなければ」「これも調べる必要がある」と、脳内CPUが急速に熱くなっていく。この加速した状態が研究者として楽しい瞬間の一つでもある。もうすぐ春休みがやってくる。また、調査に出かけねばならない。



### 編集後記



最近仕事上でもカタカナ語が増えています。一度どんな言葉か調べてみても次に見たときに思い出せず、日本語だったら漢字でなんとなくわかるのになと思う時があります。カタカナ語の方が“気になる言葉”にはなりやすいですが、膨張した意味を覚えるのは大変ですね。さて、私の家にもツンドクス石があります。内緒ですが、図書館の本をうきうきして借りるのに、読めずに返してしまうことも。生き物を大切にできていないことに気づきました。それなのに、今回の図書館だよりに掲載されている本がいくつか気になります。紹介文を読むとその本に魅力を感じますし、「自分だったらどう感じるのだろう」と考えたりします。そんな私にもお気に入りの小説があります。いつかみなさんにオススメする機会を楽しみにしています。

(図書係 八頭司)